

# 宵の明星

第二十八号

# 目次

マキ	カジ	2
迷子の子	段波	4
皇帝と少年	段波	7
傘	文月	19
電車	文月	22
僕には分からない君	段波	29

マキ

カジ

私はある青い惑星を見ていた。そこでは二足歩行の奴らが世界を支配しており、生物が考えるべきではないことまで考えて、しかしその一生の短さ故答えを出せずに皆、骸となっていた。その生物を観察するのが私の暇つぶしだった。

その幼い少女は名をマキといった。なかなか美しい娘であった。マキはとても珍しいことに私を捉えることができ、そしてなぜだか守らねばならないものであるかのように扱った。私はミャーコと呼ばれていた。

マキは、父母にいつも私の話をしたが、彼らは私のことを見ることができないうために、いつも困惑させられていた。彼女の両親はいつも、

「いない猫の話をするなんてこと、近所に聞かれたら困るからこの子は外に出させないようにしよう」

「でもあなた、あの子がかわいそうじゃない」  
なんてことを言い合っていた。

マキは時折私に向かつて、どうしておとうとおかあはミャーコが見えないんだらうね。と少し寂しそうにつぶやいた。それ

はそうだろう。自分の見える世界を自分の最も愛する人たちに否定される悲しさは到底少女に受け流せるものではないはずだ。ある日、マキと両親は「村の長」の葬式に行った。そこには仏壇というものがあり、頭を鏡のようにした男性が何かぶつぶつと唱えていた。

確か仏というのは、私の一つの姿であったはずだ。子供にはまれに私の全体の姿を捉えられるものもいるが、大人になってから私の存在に気付いたものは大抵、私を想起するとき変な姿を想像するのだ。そういう奴らの前に猫の姿で行っても全く認識されないので、面倒くさくなって昔はよく仏だか神だかアッラーだか知らないが、相手の想像している姿に化けて出て行ってやったものだ。そういう大人に限って信頼があり、変な姿を広めて回るものだから、面倒くさい限りである。

マキは小さい声で、仏壇の小さい仏を見て、

「あれミャーコだよ、だけどなんか形が変」  
とつぶやいた。大人たちは笑ってくれていた。

そのあとマキは家から出してもらえなくなった。マキは私がいることで不幸になったのだ。

しかしマキは私に

「ミャーコだけが私の味方だよ」

と言った。

私はマキに幸せになってほしいと思った。だから私は姿を消し、マキを観察するのをやめた。

今日、マキが天界にきた。

マキは私のことを全く覚えていなかった。

迷子の子

段波

「んんん……??」

どこだここ。道？ そりゃそうだ。

頭がくらくらする。記憶があいまいだ。私はどうしてここに  
いるんだろう……。

ゆっくりと確認してみよう。友達と遊んでいた。そこまでは  
覚えている。カラオケ行って、タピオカ飲んで……、そこから  
がわからない。んー、取り敢えずスマホ見るか。

00・50

うわー。もうこんな時間か。早く帰ろ。でも、こっからどう  
帰るんだろう……。まあ、スマホあるし、大丈夫かな。

ブツ

切れた！ ダメ押しで、スマホの電源ボタンを長押しする。

おっ。起動画面がでた。あ、切れた。

しばらく考えたあと、私はこのままじっとしていても何にも  
ならないことに気づき、とにかく歩き回ってみることにした。

公園とか地図があるし、交番で警官に聞くのもありかな。

うろろうと歩き回ると、夜の街の治安が悪いことが分かった。

酔っぱらったおじさんが2人もいて、よろよろと歩いていた。  
こんなのに道を聞けるか！

ちなみに、公衆電話もなかった。公衆電話なんて古いー、ス  
マホあればいいじゃんと思っていたのに、今はそれが恨めしい。

でも、あてもなく彷徨っていると、公園を見つけた。公園の  
名前に聞き覚えはなかったが、地図はちゃんとするようだった。  
暗い中で地図に目を凝らすと、さっきまで遊んでいたショッピ  
ングモールを見つけた。とりあえず、そこまで行くか。えーと、  
あっちの方向にいったって、大きな通りに入ったら右で、そこから  
4つ目の曲がり角で右、そのまま真っすぐで着くと。右、4、  
右、覚えた。でも、足が疲れているかな。少し休むか。

公園を見渡し、ベンチの方へ行く。するとそこには、小学校  
中学年くらいの男の子が身を縮こまらせて寝ていた。ついつい、  
声をかける。

「ねえ、起きな。こんなところで寝てたら、風邪ひいちまうよ」

しゃがんで男の子の体を揺らしてやると、男の子はむにゃむ  
にゃと言いながら起き上がる。

「だれ？」

「私は、平賀すもも。君は？」

「近江きいろ」

「そう。きいろくん、君は迷子なの？」

「迷子じゃない！」

それは、年相応の意地に見えた。

「じゃあ、おうちまでの道分かる？」

「……分かんない」

「じゃあ、迷子じゃん」

そう言っつてやると、きいろくんは恥ずかしそうにそっぽを向く。

「ねえ、住所分かる？」

「……分かる」

「じゃあ、連れて行ってあげるよ」

よく見ると、きいろくんの目は赤く充血していた。きつと、寂しくて泣いて、泣きつかれて寝てしまったのだろう。少しめんどくさいけど、きいろくんがかわいそうで、助けてあげたいと思った。

「ありがとう……平賀さん」

「すももちゃんでいいよ」

「すももさん……ありがとう」

きいろくんの住所は、公園の地図によると、結構遠くにあり、区画の名前が矢印で書かれているだけだった。とりあえず矢印

の地点に行ってみることにする。

きいろくんの小さな手を握って、夜の町を歩く。

「ねえ、すももさんは何年生？」

「高校1年生だよ」

「へえ……お姉さんなんだね！ すももさんの好きな食べ物  
は！」

「名前の通り、すももだよ」

「すももって酸っぱいから嫌い！」

すもものおいしさを説いてみるが、きいろくんには伝わらなかつたらしく、

「だって酸っぱいじゃん！」

すももはちょっと子供には難しい味かなと思って、あきらめた。きいろくんは、沈黙を埋めるように、矢継ぎ早に質問してくる。

「何か趣味とかあるの!？」

「うーん、趣味か……強いて言うなら、カラオケかな」

さらにしばらく質問していると、ネタが尽きたようで、

「嫌いな食べ物は何!」

「それさっきも聞いたよ。ももがこの世で一番嫌い」

「え……、えっと……」

同じような質問をしてしまった。沈黙が二人の間を這う。き

いろくんは今にも泣きそうになっていた。

「ねえ、きいろくんの好きな食べ物は何？」

泣かれてほしくないのです、こっちからも質問する。

「えっとね、りんごが好き！」

「なんで？」

「だって、おいしいから！」

そう言えば、このくらいの小さな子と話すのは久しぶりな気がする。何なら、私が小学生の時以来だ。きいろくんはかわいくて、いつまでも話したいくらい楽しい時間だった。

それなりに長い距離を歩いて、やっときいろくんの言う住所に着いた。

「ねえ、ここで合ってる？」

そう言うと、きいろくんはこくと頷く。きいろくんの家のチャイムを鳴らす。ピンポンという音が家に響くが、しばらく待っても誰も出てこない。

なんとなくわかっていった。夜中に子どもを一人にする家庭などこんなものだと。でも、どうしても悲しくなってしまう。

きいろくんが、家の外扉を開ける。

「ありがとう、すももさん」

「うん。どういたしまして」

踵を返し、帰路につく。

「ばいばい！ すももさん！」

足を止めて、振り返る。

「ばいばい、きいろくん」

きいろくんが家に入るのを見届けてから、また歩き出す。

やっぱ、自分愛されているんだなあ……。なんて、高校生にもなつて気づいた。別に仲がいいわけじゃない。親なんて、うるさいだけで、大っ嫌いだ。でも、愛されてるっていうのは、悪い気分がしない。

帰るか。一回あの公園に戻って、そこからシヨツピングモールを目指す。だいぶ歩くことになりそうだ。

夜だから、音を立てないよう静かに歩く。親への言い訳を考えながら。

段波

アントは、普通の少年である。いくつかの秀でたものを持ち、いくつかの劣ったものを持つ。誰の代わりにもなり、誰もが代わりになれる。そんな少年である。だから——ありていに言ってしまうえば、アントが今後送ることとなる人生は、普通の少年である彼にとって、分不相応なものなのである。

アントの人生の分岐点は、10歳の夏、雨が降り、農作業を中断して家族と休息をとっているところであった。

アントは家で編み物の練習をしていたが、段々と飽きてきて、船を漕いでしまっていた。地面に降る雨の音、屋根に当たる雨の音、雨が近くの川を流れる音、そんな音たちに耳を傾けながら、何か違和感を覚えた。

「母さん、何の音かしら」

「音って、何の音？」

「なにか、大勢の人が歩いているような音。母さんには聞こえないの？」

「聞こえないわ。アント、もう眠くなっちゃったのね。編み物をやめて、寝てもいいわよ」

「うん。そうするよ」

アントは、眠たげな声で母ヴェスナに返事をする。そしてヴェスナも作っていた編み物を置くと、アントのために床を準備し始めた。

「なあ、ヴェスナ。アントの言う通り、何か音が聞こえるぞ」と言ったのは、アントの父タバンだった。心配そうな顔をしている。

「あら、じゃあ何の音かしら……こんな雨の中で」

「盗賊かもしれない」

タバンは、低い声でそう言った。ひゃっ、とアントが息を飲む。

「盗賊って……ほんと？」

アントは、不安と好奇心を半々で混ぜたような声で、そう言った。

だがタバンは一顧だにせず、

「アント、ヴェスナ、静かにしておくんだ」



と言ひ、家の隅にあつた野獸撃退用の槍を持つと、玄関の方へ行く。ヴェスナはアントを傍に引き寄せ、包み込むように抱きしめた。

タバンは玄関の前で槍を抱え、しばらく待った。やはり雨の音に紛れて大勢の人が歩いているような音がしており、あるときふと止まった。

どん、どん、どん、と戸が叩かれる。

「おい、何の用だ」

タバンはどすを利かせた声でそう言った。槍に力を籠め、侵入者へ今にも刺してやらんと構える。

がらがら、と、戸が開いた。そこにいたのは、盗賊ではなく、タバンのよく知る顔で、この村の村長であつた。

「ああ、村長でしたか」

タバンはふう、と力を抜き、槍を村長に見えないよう玄関の裏へ立てかけた。

「これはこれは、先ほどは失礼しました。雨のなかご苦労さまです。どうぞ、外は寒いでしよう。中へ入りましょう」

村長が家の中に入れるようさりげなく一歩下がる。だが、村長は家の中に入ろうとしなかつた。

「どうかしましたか？　そういえば、先ほどから大勢の人が歩く音が聞こえていまして。何かご存じですか？」

村長は黙つたままだつた。何かおかしいとタバンが思つていと、

「私が話そう」

と、村長の後ろから声をする。すると村長が横に動き、代わり後ろから男が入ってくる。

その男は、朱を基調としたきらびやかな服に、装飾品を多分につけており、この村の住民とは比較にならないほど高貴な人だとわかつた。

「私は、皇帝の勅使である。其方が、アントの父タバンであるか」

タバンは突然のことに、返事さえできなかった。皇帝の勅使とは、自分とは住む世界がまるで違い、自分のところに来た理由が一つも思い当たらなかつた。

「其方が、タバンであるか」

勅使は、もう一度そう言った。タバンはどもりながらも、

「は、はい、そうでございます」と、やつとのこと答えた。勅使はタバンが狼狽しているのを知りながら、構わずに続ける。

「皇帝からの、言付きを伝える。其方タバンの育てている子アントは、皇帝の血を流す者である。なので、アントを皇子として、王宮へ迎える」

タバンは話についていけなかった。わかったことは、この勅使がアントを自分の子ではないと言っていることで、それはとても信じられる話ではなかった。

「おい」

勅使はそう言った。タバンは自分に言われたものだと思いはつとしたが、実際は、後ろにいる部下たちへのものだった。

数人の男たちが家の中へ入ってくる。彼らはみな同じ服装で、軽い武装をしていた。

彼らは家の奥まで行くと、とっさのことに固まっていたヴェスナからアントを引きはがす。

「お、おい、やめろ！」

タバンは男たちに殴りかかった。一人の男にタバンのこぶしが命中した。だが、他の男たちが後ろからタバンを殴りつける。タバンはなすすべもなく、倒れてしまった。

「父さん！」

アントが叫ぶ。だが男たちは倒れているタバんに構わず、家の外へ連れ出す。

そして男たちは丁寧にあんとを抱え、馬車に座らせる。

「さあ、都へ帰るぞ」

勅使が言った。

こうして、アントは都へ行った。

しばらく経ってアントは成長し、都で多くのことを学んだ。

彼はもはや無知な農民の息子ではなく、立派に教育を受けた都会の皇子であった。

アントが故郷を離れ、都に連れられた後、すぐに皇帝オドゲレルと会った。皇帝は玉座に腰掛け、アントは階下に立ったままだった。がっしりとした体、洗い風格のある顔。そして何より、王者の風格。我こそが皇帝だと主張するそのオーラは、先程までただの農民の息子であったアントを震え上がらせた。まるで自分が取って食われでもするような気持に襲われたのである。

アントは何も言えなかった。オドゲレルの顔を見上げ、ただ時間が過ぎてゆくのを待つばかりだった。だがオドゲレルは、アントに対してこういった。

「アント、我が息子よ、よくぞ私の元まで来てくれた。歓迎しよう」

強面な顔は、すこし和らいでいた。そのとき、アントの恐怖の中に、少しだけ安堵が生まれた。

それから時間が過ぎ、アントに与えられた部屋の中で

「懐かしいものだ。アントが来てからもう4年か」

と言ったのはアントの兄フレルバータルだった。彼はオドゲレルの長男であり、アントの唯一の兄だ。

「そうだね、兄さん」

「あの時のアントは、このくらいいちいさくて、子猫みたいに、おどおどとしていたよ」

フレルバータルが腰のあたりに手をやると、アントは恥ずかしそうな、照れくさいような顔をする。

「あの頃は、父さんが盗賊の頭領にみえたよ。だって顔が怖いんだもの」

フレルバータルは快活に笑う。

「ああ、そうだな。盗賊の頭領か、確かにぴったりだ」

アントも笑った。アントにオドゲレルを怖がる気持ちが残っていないわけではない。しかし、フレルバータルと話することで、それはどんどんとなくなっているようだった。フレルバータルはアントにとって、優しく、自分を包んでくれる存在だった。

「そう、あれが——皇帝の風格だ」

フレルバータルは将来皇帝になる皇太子である。オドゲレルより顔に風格があるわけではないが、ときどき野心を見せることがあった。アントはそれが怖く、しかし憧れていた。

「皇帝は何を考えているのだろうか」

フレルバータルはそう漏らした。父さんではなく皇帝。

「それは、フレルバータル様が優秀だからなのではないですか」

アントはそう答える。フレルバータル様。その呼び方は、二人の立場の変化を示していた。

「だからといって農業大臣とは、畑違いにも程がある。皇太子は皇帝補佐が慣例なのだがな」

アントは答えなかった。推測される答えはいくつかあったが、それはどれも分かり切っていて、言いたくなかった。

「アント、すまないな。付き合わせてしまった」

「大丈夫です。私は楽しいですよ。この仕事」

会話が途切れ、沈黙が訪れる。アントは止まっていた手を動かして始めた。しかし、フレルバータルはぼおとしたままだった。

「フレルバータル様、早くしないと今日中におわりませんよ」

「ああ……」

フレルバータルは何か考えているようだった。フレルバータルにしては珍しいことだったので、アントは少し心配になった。

「大丈夫ですか？ 私でよければ相談に乗りますよ」

「ふふ……、大丈夫だ、問題ない。少し、アントに話したいことがあるんだ。いいかな？」

アントは仕事の手を止め、フレルバータルの方に向いた。

「何でしょうか」

「アントには好きな人はいるか？」

アントには確かに信じられなかった。フレルバータルがそんな質問をするとは思わなかった。

「いいえ、いません」

「そうか……いないか」

そう言って、フレルバータルは黙ってしまった。フレルバータルは能面を気取っているが、アントにはなんだか悲しそうに見えた。

「フレルバータル様は、好きな人がいらっしやるのですか？」

「ああ……いた。でも、ひどく裏切られてしまったんだ」

フレルバータルはふうと一息つき、続ける。

「でも、私は人を愛してはいけないのかもしれない。愛なんて、私には必要ないかもしれない」

「いいえ、違うと思います」

アントの言葉に力がこもる。

「フレルバータル様は、人を愛してもいいと思います。皇帝となるためというのなら、そんな悲しい顔をされてはいけません」

アントもまた、アントらしくなかった。フレルバータルが悲しむのが嫌だった。フレルバータルが人を愛してはいけないなんて、そんなことないと思った。

「やっぱり、いるじゃないか」

ぽつりと、フレルバータルが言った。

「何がですか？」

「いいや、何でもなし」

少しの沈黙のあと、二人は自然と、止めていた手を動かした。

アントにとってオドゲレルは怖く、恐ろしい存在であったが、父でもあった。アントはオドゲレルに会うことはなかなかなく、あっても玉座と階下という立ち位置だったが、それでもオドゲレルの愛というものを少なからず感じていた。

アントは都に来るまで教育を受けたことがなかったので、皇子としての教育は、ときとして辛いものだった。年の離れた弟たちと一緒に授業を受けていても、自分の頭の悪さ、十数年と

いう遅れを思い知らされるのだ。フレルバータルも励ましてくれたが、フレルバータルは頭がよく、すでに教育のすべてを修めていたので、アントの劣等感がなくなることはなかった。

そんなある日、アントが意気消沈して自室に戻ると、そこに一つの赤く熟した果物がおかれていた。その果物はとても貴重なもの、都内で皇帝のために栽培されていると聞いていたものだった。アントがそれを口にすると、果実がとろけていき、舌がしびれるほど甘かった。そうしてアントは、自分が愛されていると、家族であると、知ったのだった。

「オドゲレル、今から私が皇帝だ」

とフレルバータルが言ったとき、アントは驚いて、そして納得した。フレルバータルの野心はいずれその方向に向かうことは明らかだったからだ。

「何のつもりだ、フレルバータル。私が皇帝だ」

オドゲレルはフレルバータルに皇帝を譲る気はないようだった。皇帝の貫禄のある声が、響く。

「オドゲレル、貴様は老いた。私の方が皇帝にふさわしい」

だがフレルバータルも威厳と野心を持って宣言する。二人の視線が交差し、にらみ合う。

アントは、フレルバータルにこのことを聞いていなかった。今日は農業の成果を報告するために来たし、その資料も用意していた。周りの反応を見るに、誰にも言っていないのだろう。だから、アントはこう解釈した。フレルバータルは、ここにいる家臣たちに自分とオドゲレル、どちらが皇帝にふさわしいか判断させようとしているのだ、と。

家臣たちは驚いた顔をしつつも黙ったままだった。突然のことに固まっているか、どちらにつくのが賢明か考えているのだろうか。静寂の中、フレルバータルは歩き出した。謁見のときに近づいてはいけない線をいとも簡単に超え、王座への階段を昇る。

護衛の近衛兵が槍をフレルバータルに向けた。穂先が喉に降れるほど近くにあった。だが、フレルバータルは階下の家臣たち聞こえるような大きな声でいった。

「私は、このようなものを恐れはしない」

フレルバータルは進む。フレルバータルの喉に穂先が食い込んでいき、近衛兵が一步後ずさる。そのまま近衛兵はするすると後ろへ行き、玉座に当たり、みっともなくしりもちをついた。そして、フレルバータルは近衛兵の落とした槍を拾い、玉座に座るオドゲレルに向ける。

「貴様が私より皇帝にふさわしいというのなら、このまま立ち上がって見せよ」

オドゲレルは黙っていた。彼にはその度胸がなかった。年季を重ねた威厳があらうとも、フレルバータルを恐れ、自分から遠ざけようとした臆病者なのだから。

フレルバータルの勝ちだ、とアントは思った。オドゲレルは完膚なきまでに負けた。これでフレルバータルが皇帝となるだろう。だが一方で、こうも思った。もう終わってくれ。一歩下がってくれ。彼らは皇帝の座をめぐる前に、親子なのだから――。

それでも、フレルバータルは進んだ。

フレルバータルはオドゲレルを殺したあと、その場で王冠を奪い、即位した。その場にいた家臣たちでその即位に反対するものはいなかった。そもそも皇太子でもあるので、フレルバータルの権力掌握は順調に進んでいた。

アントは皇帝直属の高官となった。アントは有能ではないので、役に立てることは少なかったが、些事の許可や、フレルバータルの話し相手になるなどしていた。

そして、アントの出自は今までは伏せられていたが、フレルバータルが即位して、自然と公のものになっていった。フレルバータルが即位した今、アントは皇子としてではなく、フレルバータルの直臣として身分を保証されているので、伏せる必要がなくなったのだ。そこで、アントの両親が農民であるのはよくないということになり、アントが彼らを都に連れていくこととなった。

しかしアントは、故郷のことが嫌いになっていた。都でたびたび見る農民たちは、汚く、乱暴な言葉を話し、それらに都の人たちは嫌悪感を抱き侮蔑の目で見る。アントは最初からそうだったわけではないが、都で過ごすうち、自然と都の人と同じ感情を抱くようになってしまった。

近くの豪族の屋敷でアントの両親は待つているとのことだった。アントが屋敷に入ると、その豪族の部下が並んでアントを迎える。形式張った口上を言われた後、部屋に案内された。そこで待っていると、ドアをたたく音がする。

「アント様、ご家族をお連れしました」  
「入れ」

短い言葉の後、ドアが開き、タバンとヴェスナと、見知らぬ少年が入ってくる。

「アント様、お久しぶりでございます」

タバンとヴェスナは、アントの知っているところと比べて老けていた。だが、アントの頭の中に少なからず思い出が蘇る。例えばタバンと一緒に虫を取った日々、例えばヴェスナの膝で寝た感触。だが気づく。あのときとは違うところに。あのときと似ていることに。二人と共に入ってきた少年が、怯えと好奇心を混ぜた目をしていることに。

「その子は、誰だ？」

「アント様の弟、私たちの息子、バーバチカでございます」

ヴェスナが答える。アントにはもうその場にいることはできなかった。部屋を出、馬車へたどり着く。隊の半分をタバンたちの護送に裂き、残りの半分を連れて、都へと走らせた。

フレルバータルの野心は、皇帝の座を手に入れて終わることはなかった。もつと先、もつと多くの領土と、もつと多くの権威を求めて日々輝きを増していた。

フレルバータルは国内を安定させた後、さらなる行動を起こした。隣国に侵攻し、市を制し、蛮族を滅ぼす。アントもそんなフレルバータルを支える忙しい日々が続いた。

「アント、君は休暇を取ったほうがいい」

「いえ、大丈夫です。フレルバータル様が頑張っているのに、休むわけにはいきません」

アントはこう言ったが、アントが疲れているのは本当だった。度重なる激務で、あまり有能ではないアントは十分に寝ることすらできていなかった。

「私の方は大丈夫だ。アント、君はこのままではいつか倒れてしまう。それよりもゆつくりと休んでから私の役に立つてほしいのだ」

結局、アントはフレルバータルの強い言葉に押し切られる形で休みを取ることになった。

休んでみると、アントは自分の疲れに気がついた。このままでは、フレルバータル様についていけない、そんな不安もよぎってしまう。

ドアがコンコン、と叩かれた。

「誰だ？」

ドアの向こう側に聞こえるような声を張る。

「バーバチカです」

その声は声変わりしたての、少し低いくらいの声だった。

「バーバチカ…」

子供？ と疑問に思うが、すぐに納得した。鮮明な記憶が蘇ってくる。アントは、そのことを考えたくなかった。アントはもう故郷のことを一片でも考えたくなかった。

「アント：お兄さん？ 話がしたいんです。お兄さんと」

だが、少し逡巡して、アントはドアを開けることにした。それは、自分のショックにバーバチカの意思は存在せず、自分が一方的に怖がっているだけだと気付いたからだ。アントとバーバチカはまだ一言も交わしていない赤の他人なのである。

ドアが開け、バーバチカを招き入れる。バーバチカは落ち着かないように、肩をもじもじとさせていた。

「もう少し：早く来たかった。でも、言葉遣いがちゃんとしていないといけないとかあって：」

バーバチカは少年だった。ただ、慣れない都に戸惑っているだけの少年だった。

「バーバチカ：私の弟：か。昔の私より、しっかりしている」  
バーバチカを、部屋に招き入れる。椅子が一つしかなかったのでそこにバーバチカを座らせ、アントはベッドに腰掛ける。

「ねえ、お兄さん」

「何かな？」

「お兄さんはすぐ偉いって聞いて：僕とっても誇らしくなったんだ。だって、僕のお兄さんなんだから。だから、もつとお兄さんのことが知りたい。もつともつと！」

バーバチカの勢いのよい姿勢に、アントは戸惑いながらも、悪い気はしなかった。

「ああ、教えて上げるよ。そうだな：私が都に来たときは、今のバーバチカよりもつと戸惑っていて、いや、怯えていた。でも、そんな私に対してフレルバートル様は：」

それからもたびたびアントはバーバチカを部屋に呼んで話をした。ときには勉強を教えたり、都を案内したりした。アントはバーバチカと話すのがとても楽しみになっていった。それはフレルバートルが帰ってきて通常業務に戻ったあとと続き、日課のようになっていた。

前の皇帝オドゲレルが大事にしていた果物の木は、フレルバートルの治世でも植わっている。果物がなるたび、フレルバートルはアントを呼んで一緒に食べていた。

「しかし、この果物はこれで最後だ」

「フレルバートル様、それはなぜですか？」



果物を食べられる最後の食事には、バーバチカも参加していた。バーバチカはフレルバルの弟の弟なので、アントからほどではないもののフレルバルからよく可愛がられており、アントとフレルバルが仕事以外で会うときはたいいていバーバチカがいるようになっていた。

「実は、この果物を作るのに結構な金額と労力がかかっているんだ。この3人しか食べないのに、大きな無駄だよ。他のことに使ったほうが有意義だ。最近ではオドゲレルの影響もなくなってきたし、そろそろ育てなくてもいいと思っただ」

「へえ：そうだったんですか。この国で一番美味しいのに、もったいないですね」

「美味しいものには、それなりの対価が必要なのだよ」

フレルバルはしみじみとそう言った。政治の難しさを考えているのかもしれない。それを見て、アントは少し笑ってしまふ。さらにそれを見て、フレルバルも笑ってしまった。

そして、二人につられてバーバチカも笑う。暫くの間、幸せな笑い声が響いていた。

フレルバルはまた、遠征に出かける。だが、今度の遠征で一区切り付きそうだった。この遠征で近くの大国が崩れることで、帝国に対峙できる国はなくなり、あとは小国に影響力を

広げていくだけで地域の覇権は手に入る。だが、どうしてもアントにはフレルバルの野心がそれで満足するとは思えなかった。天を制し、逆らうものがいなくなるまで終わらないと思えなかった。

一方でバーバチカは、都になじんでいた。アントとフレルバルに親しいこともあり、最高の教育を受け、都の常識を吸収していった。それでもまだ少年で、フレルバルが戦争の話をしてくれるのを楽しみに待っていた。

そんなある日、事件は起きた。バーバチカが都で教育を受けているとき、歴史教師がバーバチカを襲ったのだ。歴史教師はとても年老いていて、バーバチカでも組み伏せられるくらいだったので、バーバチカは軽傷で済んだ。だが、それを聞いたアントは、自分の中で今まで抑えていた気持ちが、どばどばと溢れ出ていくのを感じていた。

「なぜ、バーバチカを襲った」

アントは、バーバチカを襲った歴史教師に直接尋ねることにした。そうでないと、気が収まらなかったのだ。

「私の故郷は、帝国でございます。しかし、私の息子は、一人は帝国、一人は東隣の王国、一人は南の漁業都市に住んでいます。私の孫は、一人が帝国、二人が東隣の王国、一人が西の山

の奥の国、一人がずっと南の島に住んでいます。そして、あと三人はわからないほど遠くの国で住んでいます」

「何が言いたい」

「私たちは、争うべきではありません。皆が親戚で、血の繋がった関係なのです。この歴史が、それを証明している。争いが必要ならば、どれほど素晴らしい世界になったか！」

そこまでいい終えて、歴史教師は舌を嚙んだ。

「皆が親戚か…。私とフレルバータルは、私とバーバチカは、果たして血が繋がっているのかな」

アントは自嘲気味に笑う。

フレルバータルが帰ってきた日、アントは都の大臣たちをまとめて門の上に立った。軍を率いて開門をまつフレルバータルに、声をかける。

「フレルバータル、あなたは間違っている。争いなどするべきではなかった。その野心の灯る目、それは危険だ。世を乱し、人々を傷つける。だから、貴方は皇帝であるべきじゃない」

フレルバータルは驚きのあまり、硬直していた。しかし、すぐにその感情を怒りにかえて叫ぶ。

「アント！ 裏切ったな！ 門を開ける！」

だが、門は開かない。

「殺せ」

アントははつきりとそう言った。その瞬間、フレルバータルの視線が鋭くアントを突き刺すが、放たれた弓が何本も突き刺さってフレルバータルは倒れた。

アントは久しぶりに恐怖というものを感じた。いや、それは表面だけで、実際はずっと恐怖を感じていたのだろう。それほどの家臣も同じ、どの兵たちも同じだ。それがわかっているからこそ、皆フレルバータルの世を拒んだのだ。

アントは皇帝として即位した。もともと、アントはただの農民の子として生まれた。農民として作物を作るだけの人生を送るはずだったのだ。だが、アントはそういったありきたりな人生は送らなかった。それが必然なのか偶然なのかはアントにはわからない。だが、アントは自分なりにやることをやろうと思っている。

アントの治世は、戦争を辞め、国をゆっくりと発展させていくことから始まった。少なくとも今の平穏を守ろうと、アントは彼なりに頑張った。その結果アントの治世の間、戦争が起こることはなかった。

アントは忙しくなったが、たまにバーバチカと会うようにしている。これが、アントの守りたい平穏なのだ。

なんたら前線というものが通過した後らしく、街は雨音に呑まれていた。

学校を出た時には晴れていたが、電車に乗っているうちに天候が崩れた。傘も持っていないので、駅で立ち往生することになった。

ところで周囲の人たちは誰も彼も予知能力でも持っているのか？ 皆次々と傘をさして駅から出ていく。

……天気予報をまともに見ていなかった僕が悪いです。

この土砂降りの中を走って突っ切るのは気が引ける。一方この小さい駅にはコンビニなんて気の利いたものはなく、傘を買うこともできない。

「……あれは？」

ぶらぶら構内を歩いていて、自販機の裏に見つけたのは一本の傘だった。どこでも売っているようなチープな白いビニール傘。

「……………」

周囲を確認する。監視カメラなんてどこにもない。駅員もなぜか数週間前からいない。人員削減だそうだ。

誰にも見られていないと分かった瞬間、不道德な考えが急速に拡大していった。

「ちよつとくらしいいよね。ちよつとくらしい」

安いビニール傘をわざわざ探しに来るような人もいないだろう。このまま放置されるのなら僕に使われた方がいいよね。うん。

「……いいよね」

傘を手にとると、それを広げてそそくさと駅を後にした。

帰宅。

途端に罪悪感が見るみる湧いてくる。人のものを勝手に取って持ち帰ったのだ。それに、確認できなかったただどこかに監視カメラがあったかもしれない。あるいは客の誰かが見ていたかもしれない。

気をそらしたくなり、傘を手にとってまじまじと見つめた。

さほど使い込まれてはいないようだが、持ち手には名前シールが貼ってあった。

「朝倉遥」

丁寧「あきくらはるか」と読み仮名まで付けてある。

どうせコンビニ傘と違って取ってきてしまったが、しっかり使われているらしい。

朝倉遙に返して、謝るべきだ。

先ほどとは打って変わってそう思うようになった。

それでもどの誰なのか全く分からないし、返しようもない。遙というのも無性的な名前で、性別すらも特定することはできない。名前シールからなぜか学生を想像したが、違うかもしれない。

しばらく考えたが、何も手立ては思いつかず、傘立てに突っ込んだ。

それから数日の間、この傘のことは忘れていた。

……というわけにはいかなかった。豪雨は続き、傘は生活になくってはならないものとなっていたのだ。もちろん使う傘は自分のものだが、傘立てを前にするたびに朝倉遙の傘が目に入る。忘れられるわけではない。

じとじと続く雨が少し弱まった日の昼、転機は訪れた。

別に朝倉遙が僕を訪ねてきたとか、朝倉遙が僕の学校に転校してきたとか、そんなドラマチックなことは起きていない。

単に思い出しただけだった。

二カ月ほど前、豊橋という友人がちらりと saying いた。中学の頃、同じ塾に朝倉という生徒がおり、成績優秀で市西部の丘陵地帯にある名門校に通うことになったとのこと。

例の駅は西部丘陵にも通じていたし、その名門校の生徒もよく利用する。

その話を思い出した途端、確証が持てたような気になり、その友人に話を聞こうと小走りに隣のクラスへ向かった。

「朝倉の本名？ ええと、朝倉遙、でよかったですよ。連絡も取れるけど。でもなんでそんなことを？」

事情を説明してあげたが、ややおぎなりになっていたかもしれない。

そして翌日。

僕は両手に傘を持って交差点にいた。

目の前には名門校として有名な私立高校がある。

まだ日没には早いですが、分厚い黒雲と際限のない雨のせいで辺りは夜のようなだった。車のランプと家々のポーチの明かりだけが光源だった。

雨の先、道路の向こうでは、人影がぞろぞろと校門から出てきては足を止めている。

朝倉遙というのとはどんな人物なのだろう。豊橋の話から勝手に真面目な優等生を想像しているけど、活発な性格かもしれないし、逆に内気かもしれない。好意的に対応してくれるかもしれないし、こちらを詰問してくるかもしれない。

緊張を抑えようとしたが、そんなことはできずため息をつく。

いずれにせよ、傘を勝手に使った僕は謝るしかないのだ。信号が青に変わった。

動かない僕を横目に人影は次々と通り過ぎ、駅の方へ向かっていく。人の列は無限に続くようにすら思えた。

「すみません、あなたが坂口さんですか？ 豊橋君の友達の」  
振り向く。

そこに立っていた少女は。

「傘勝手に使っちゃって本当に申し訳ありませんでした」

「ああ、全然いいですよ。名前シールは何となく貼っただけですし、つい最近、急な雨の時に買ったものですから。こちらこそわざわざありがとうございます」

その後普通に家に帰って寝た。

太陽が眩しくて思わず窓から顔を背けた。

車内を見渡すと、混雑はしていないものの座る席などとうになく、このまま立ち続けるしかなさそうだった。

視界には、電車の壁に背中を預けている女子高生の姿があった。運動部のような。その隣には男子高校生が立っている……

いや、男子中学生？ 小柄な体躯に幼い顔立ち、髪は少し長い。

描写したところで、この狭い電車の中で何らかの縁が生じるはずもない。完全な無関係である。

「次はーふたつきーふたつきー」

……ふたつきなどという駅名は初耳だ。

路線を間違えた？ いや、いつもと全く同じ時間に、いつもと全く同じ乗り場でいつもと全く同じ電車に乗った。

では乗り過ぎした？ 寝てもいないのに？

腕時計を見ると、乗車してから七分が経過していた。目的地まではまだ少しある。乗り過ぎしたわけではなさそうだ。

とにかく、ふたつき駅の謎を探らねばならない。結構奇妙な事態なのに、頭がさえていないのか全く危機感がない。

とりあえず窓の外の風景はいつもと同じようだった。地図アブリを開いてみても、現在地はいつもの街の線路上。

さて、車内に目を向けると、静寂の中、じわじわと戸惑いが広がっていた。が、それ以上大きくはならない。アナウンスが間違っているだけ、という風にでも納得したのだろうか。

今のところ、アナウンス以外に異常な箇所はない。ならばこのまま日常を期待するのが最善と思われた。

さらに七分が経過した。いつもならとうに駅に着いていなければならぬ時刻である。

窓の外の景色は揃いも揃って背の低い街並みで、電車は淡々と走り続けている。

あきれるほどに平穏だが、異常事態に違いはない。

車内は徐々に混乱に満たされていく。

「誰か、非常ボタンを！」

異様に渋い男性の声が響いた。突き動かされるように貧相なサラリーマンが非常ボタンを押す。

全くの無反応だった。いや、非常ボタンを押したらどうなるのか完全に把握しているわけではないが、音が鳴ったり車掌が応対に出たりといったことは一切起こらなかった。もちろん電

車も止まらない。

車内が一気にどよめきで満ちた。

「暴走したんか？」

「大丈夫なんだろうな？」

「だれか、外に連絡を！」

慌てて自分もスマホを取り出すが、メッセージアプリを開けるまでもなかった。画面の右上に圏外の文字が浮かんでいる。電話を試みた乗客もいたが、繋がった様子はない。

何だかありきたりな怪談のようだった。

窓の外の景色は代わり映えがしないが、よく見るとそれはまったく見覚えのないものになっていた。

「帰れるんか？」

「こんなんおかしいうって。ありえへん」

「まだ朝食食ってないのに」

ふと、先ほどの女子高生の方を見ると、周章も狼狽もせず、何だかつまらなさそうな顔でスマホをいじっていた。

唐突に突き飛ばされる。

見れば、赤ら顔の中年男が周囲の乗客を追い払いながらわずかと窓に歩み寄っていた。その手にはどこかから取り出した消火器がある。

「あああああああああああああああああああああ！」

発狂したオランウータンのような叫び声を上げ、男は消火器を大きく振りかぶった。女性客の一人が悲鳴を上げる。

耳を刺すような音が響き、窓が割れた。

男はさらに窓枠に付いた尖ったガラスを消火器で薙ぎ払うと、窓枠に手をかけて外に飛び出そうとした。

しかし、窓の外に壁でもあったかのようにはじき返された。赤ら顔に困惑の色を浮かべて、無様にしりもちをついて倒れこむ。

男はおもむろに起き上がって消火器を手に取り、今度はドアのガラスを破壊したが、結果は同じだった。

乗客たちの表情も、男の行動に対する驚きから、この状況への絶望に変わる。パニックになり、声を上げて嘆く乗客も出てきた。

そんな喧騒に混じって、ため息が一つ聞こえる。

例の女子高生だった。スマホをポケットにしまうとつかつかと車両の前方へ向かっていく。騒ぐ集団が嫌になったのだろうか。

もつとも、すぐに彼女の思惑を察することができた。

いや、それが思惑かは分からないが、彼女の行動をきっかけ



に考えが浮かんだ。

自分も前方に歩き出す、すぐに誰かにぶつかった。

「あ、す、すみません」

見れば、女子高生の隣にいた、幼い顔立ちの男子学生だった。

「こちらこそ、すみません。どちらへ？」

「え、ええと、先頭車両の、運転席の様子を見に行こうと」

「なら、一緒に行きませんか？」

男子学生は、一瞬虚を突かれたような表情をした。

「は、はい、行きましょう」

怒号や泣き声ばかりの車両を二つほど進むと、先頭車両に出た。自分たちがいた車両よりはるかに人が多い。

足を止める。

目の前の運転席は、もぬけの殻だった。普段締め切られているドアがだらしなく開いていた。

「すみません、運転席はもともと誰もいなかったんですか？」

「いえ、こちらに運転手の方が」

見れば、すぐ隣に運転手がいた。

「運転席はもう使えません。どの装置も全く反応しなくなっています。」

仕方ないとはいえ運転席を放置するのどうかと思うが。

「こ、このまま放置したら、脱線とか、エネルギー切れとか、あるんですか？」

横の男子生徒がおびえた様子で問いかける。

「電線がつながっている限りエネルギーは大丈夫です。走り方も異様に安定していますが、線路上にモノがあったりしたら非常に危険です。まあ、あつたとしても止めようがありませんが」

運転手は半ばあきらめているようだった。

「本当に手詰まりって感じ」

唐突に背後から声を掛けられる。先ほどの女子高生だった。

「で、ですよ。ほかに何か、外と繋がれる手段はありますか？」

「携帯は繋がらない。窓はダメ、ドアもダメ、非常ボタンもダメ、運転席も使えない」

「屋根、とか行ってみます？」

「さすがに屋根の上に行くのは無理そうでしょう。壊せもしないし、換気扇もそう簡単に這い上がれるようなもんじゃない」

しかし、あの車両の窓やドアがダメだっただけで、ここから窓なら行けるのではないか。そう言おうとしたが、視界にはいくつもの割れた窓やドアがあった。

窓やドアから出られる確率は低そうだった。

「運転席の窓は特別とかあるかもしれない。やってみよう」  
女子高生はそう言うのと、その辺に転がっている消火器を手に取り、つかつかと運転席に入る。

「っ」

ほとんど無言のうちに、フロントガラスを破壊した。

女子高生はフロントガラスの右端から外に飛び降りようとする。が、やはり跳ね返されて運転席に着地した。

「万策尽きた、か」

電車が隔絶されてから一時間が経過した。

乗客は多くが疲れたようで、車内は静けさが回復してきている。席がなく、床に座る者も多い。

僕も男子学生と女子高生と一緒に床に座って話していた。

「面白いや名前聞いてなかったな。なんていうの？」

「ぼ、ぼくは水瀬草っついでいいです」

「学校どこ？ 見ない制服だけど」

「北野川高校の、一年生です」

ずいぶん幼い顔立ちだが、高校生だったようだ。

「じゃあ年同じじゃん。丁寧語使う必要ないよ。私は神長せいろ、高校は堀ノ江。そっちは」

僕のほうを向いて女子高生、改め神長が言う。

「僕は篠田静、西荻高校の一年。よろしく」

「じゃあ全員同い年か。すげえ偶然じゃん」

「この市に住んでるんですか？」

「そうだよ。……丁寧語使う必要ないって」

「ふ、普段からこんな感じだから、直せって言われても難しい、です」

「へえー、珍し。篠田もこの市？」

「同じく。まあ、あの市からはとっくに出てるみたいだけど」

「これいつまで持つんだろうねー？ このままずっと続くとなると食料とかも必要だし」

「弁当ならありますよ」

「面白いや学校は今どうなってるのかな？」

「西荻はこの路線使ってる人それなりにいるし、何か言われてるかもしれない」

「あ、じゃあ、この列車に同級生とかいる？」

「いや、もう少し後の電車使う人が多いから」

「そっか。まあ、今更学校とか行ってもしょうがないか」

しばらく黙った。

窓の外は相変わらず全く見たことのない街並みだった。だん

だんと建物の密度が減っていつているから、田舎のほうに移動しているのだろう。

「あー、通信できないとゲームもインスタもできないしつまらねー」

神長は早々にスマホを放り出した。

「何のゲームやってるんですか？」

「最近人気のプロジェクトワールドってやつ」

「あ、それ僕もやってる」

「ぼくもです。最近結構上達してきましたよ」

「ほんま？ 私もかなり強いよ」

「外に出れたらみんなまで遊ぶか」

またしばらく黙った。

太陽は既に高く昇っていた。

僕たちはしばらく手遊びやオフラインゲー、神長がなぜか持っていたカードゲームなどに興じた。

何となくゲームにも飽きてきたところで、僕たちは弁当を広げることにした。

「あー、私今日弁当忘れたんだった。ごめんだけど、具を分けとれない？ ちょっとだけでいいから」

「わ、分かりました。お皿とか箸とか、持ってます？」

「割りばしは持つてるけど、皿はない。ま、いっか」

どうするかと思っていると、神長は僕や水瀬の弁当に箸を突っ込んで直接自分の口へ運んでいった。同じ釜の飯ならぬ同じ弁当箱の飯を食べているわけで、何だか変な気持ちになってくる。

「あっそれはぼくが後で食べようとしてた目玉焼きっ」

「いいじゃん。ほら、篠田が持つてるし」

僕の弁当の目玉焼きを勝手に水瀬の弁当箱に移された。

「あっ僕も食べたかったのに」

もらった水瀬は素直に僕の目玉焼きを頬張る。

「……あ、この目玉焼き美味しいですね」

「僕の目玉焼きだけだな」

目玉焼きは諦めてその下のソーセージを食べる。

閉鎖された車両内で食べる昼食は、奇妙美味しかった。

雨が降り出した。

腕時計はちょうど午後三時を指している。

雨はあつという間に激しくなり、景色はかき消されて全く見えなくなった。雨音がうるさかったが、すぐに慣れた。

「私さー、陸上部なんだけどさー」

神長が唐突に話し出した。

「今日も朝練でこんな時間に来てただけど、練習だるいし、めっちゃ時間取るし、やりたいことあるのに全然できなくてさー」

「なら、辞めたらどうですか？ 部活なんて自分のためにやるものですし……」

「できたらいけど、顧問がしつこいんよー。それに部全体に辞めるなみたいな雰囲気があって、マジきついわー」

「……」

「勉強も最近わけわかめだし、ほんとどうしよー」

しばらく沈黙が続いた。

雨が壁を叩く音と、時折響く乗客の声だけが聞こえていた。割れた窓から冷気が入り込んで、水瀬が小さくくしゃみをした。

「ぼくはうらやましいですよ、陸上部」

水瀬は鼻をすすった。

「ぼくは小さいころから運動はからつきしで、あんなふうにかっこよくなりたいなーって思っても、全然できなくて。運動部には運動部なりの悩みや辛さがあると分かっても、あこがれてしまいますよ」

「ははっ。確かに水瀬、運動できそうには見えないしねー」

「うう……他人に言われると腹立ちますね……。とにかく、人間はなりたいたいものになかなかないものですよ。それでも」

水瀬は立ち上がった。

「変わろうと努力するのは、大切なことです」

水瀬は振り向いて、笑った。

「ぼくだって毎日腹筋してるんですよ」

日が完全に沈む、その直前に雨は止んで、景色がはっきりと見えるようになった。

そこにあつたのは、無。

建物らしきものほどこにもなく、広々とした草原に、ひたすら線路と電線が続いているだけだった。

地平線なんて久しぶりに見た。

「何だ、これ……。日本にこんなただっ広いところある？」

「ヤバくない？ 圏外になった時から怪しいとは思ってたけど、いよいよヤバい事態じゃん」

「なんか、昔の都市伝説みたいですね……」

他の客も驚いているようで、車両が久しぶりに喧騒で満ちた。すぐに日は沈み、辺りは一気に暗くなる。

空気が澄んでいそうな草原なのだし、満点の星空が見えてもいいものだが、曇天で星も月も一切見えない。電車の明かりだけが草原を照らしている。

「とうかもう一日終わっちゃうよ！　もしかして、このまま一生出れないの……？」

神長の叫びにこたえるかのように、電車が停まった。あっさり。

見れば、小さな駅についていた。線路はここで途切れている。

ホームに人の気配はない。

騒々しい音を立てて、破壊されていないドアが開いた。

「ええ？　これで終わり？」

戸惑いつつも、ぞろぞろと降車する乗客に続いてホームに降り立つ。途端に冷気が体を包み込んだ。

点滅している電灯で、辛うじて駅名が読めた。

「きさらぎ……いや、如月と書いてふたつきと読むのか」

いわゆる無人駅で駅員はいなかったが、改札は普通にハイテクで交通系ICカードにも対応していた。

真っ暗な駅舎を出ると、相変わらずだっ広い草原だったが、そこに一本の道があった。舗装もされている。

そして、その先にいくつもの明かりが見えた。

「町だ！　町がある！」

希望が見えて喜ぶ乗客、これからの道の長さを嘆く乗客、安堵のあまり泣き出す乗客。色々な感情が混ざり合って、あたりはとてもうるさくなかった。

しかし、不思議とその騒々しさが心地よかった。

「よっし、目指すはあの町だね！　もうひと頑張り、いくぞー！」  
確かにとてつもなく長い道だが、この二人となら町までたどり着ける気がした。

そして僕たちは一歩踏み出す。

僕には分からない君

段波

変人、というのは人に対して言うのには失礼な言葉だが、その言葉がびつたりとあてはまる、その言葉でしか表現できない人間がいるものなのだ。

「君は！ 振られた！」

なら変人という人はどんな人か、という問いに対して、具体的に答えさせてもらうなら、僕の隣で興奮している山岸大和がまさにそうだと思う。

「なぜ振られた！ どうやって振られた！ どこで振られた！」

大和は、誰かが誰かに告白したと聞くと、些か熱狂してしまつて、当事者の元に行き、弾丸のように質問する。変人としてか言いようのない奇行だ。

「い、いえ……その……」

「いいから！ 話してくれ！ さあ！」

おっと、忘れていた。僕は大和を止めるために来たのだった。

相手の襟首を掴みつるし上げようとしている大和の襟を後ろから引っ張る。

「やめろ！ 大和！ 暴力をふるうな！」

「おう、風太。どうしたんだ、そんなに興奮して」

興奮してたのはお前だ！ と叫びたいところだが、それこそ興奮しているので、冷静を努めて話す。

「もうすぐ休み時間が終わるぞ。早く帰るぞ」

「お！ もうそんな時間か。よし、帰ろうぜ、風太」

授業と授業の合間の10分休みによく違う学年まで行けるなと思いつつ、すたすたと歩く大和についていく。

「それでだな、あいつ、面白いやつだぞ」

「あいつって、さっきお前に詰問されてたやつか？」

「ああ、そうだ。あいつ、中3の男子に告白したらしいんだ」

大和曰くの「あいつ」は、中1の男子なので、同性で、2年差か。たしかに珍しいな。面白いわけではないが。

「しかし、ジェンダーフリーが叫ばれるこの世の中だからな。こういうのがどんどん増えていくんじゃないか」

「……。放課後は、中3の方から行くか……」

僕の言葉はもう聞こえていないようだった。

放課後、大和は中3の教室に勢いよく入っけいき、

「君が、振った男か！」

と、高らかに叫ぶ。

「君たちは、中2の山岸大和と福山風太！ あの、恋の始まりを収集しているという、2人組！ 噂には聞いていたが、まさか僕のところに来て来たとは！」

彼も負けじと応酬する。だいぶ噂に尾ひれがついているようだった。というか、僕は大和のストッパーで、一緒に奇行をしているつもりはなかったのだが。

「ねえ君、話を聞かせてくれないか」

大和は、先輩にも先生に対しても君呼ばわりである。なかなか失礼な奴だ。

「……。実は、僕もあのことには疑問を感じていたんだ。話すよ。だからそのかわり、君たちの見解というか、考えを聞かせてほしいんだ」

珍しい。いつもはここからが長く、結局大和が強硬手段にとって出て、僕が止めるか相手が吐くかになるのだが。

「それは幸いだ！ さあ、話を聞かせてくれ！」

僕たちが何かの研究者だと思われているが、それはともかく曾根さんの提案で近くのフリースペースで話を聞くことにした。

「君の名前は？」

「曽根爽波だ」

「どう告白された？」

「下校中に、呼び止められて、『好きです、付き合ってください』と言われた」

陳腐なセリフだが、意外とこの言葉で告白する人は多い。変に凝るよりいいと思ったのかもしれない。

「なぜ振った？」

曾根はしばらく黙って、

「男と付き合うということが、考えられなかった」と答えた。

「どう振った？」

「気が動転していて、よく覚えていないのだが、『君とは付き合えない』といった気がする」

「告白される前の彼との関係は？」

「赤の他人だ」

「へえ……。面白い。部活で一緒だったとかもないか？」

「いや、ない。僕は水泳部の部長で、部員は全員把握している」

「やめていったとか、体験入部で入っていたとかは？」

「ない」

「ふうん……。小学校で一緒だったとかは？」

「小学校？ 流石に分からないな……」

小学校のときから好きで告白したが、相手が覚えていない、

なんてよくある話だ。

「同じ登校班ではないかは、分かるか？」

「それは分かる。同じ登校班ではなかった」

それからいくつかの質問を挟んだところで、大和の気が済んだ。

「よし、質問は終わりだ。君、帰っていいよ」

「ちよつと待て、大和。曾根さん、何か気になることがあると言ってますでしたか？」

案の定、覚えていなかった。いや、最初から聞いてもいない気がする。

「ああ。僕が気になるのは、彼が僕になぜ好意を持ったか、ということだ。もしかしたら、僕がそういう人だと思われているんじゃないかと心配になってね」

「いいや、それはないと思いますよ。曾根さんは、いたって普通に見えますよ」

「そうか……安心したよ。じゃあ、理由が他にあるんだろう。君たちには何か思いつくものはないか？」

「曾根、と言ったか」

大和が口を開いた。

「人が人を好きになる理由なんて、好きになった当人でも分か

らないものだ」

「大和、そっちは僕たちの教室じゃないよ」

曾根さんの話を聞いた後、教室に置いてきた荷物を取りに行くと思いきや、大和は違う方向に歩き出した。

「大和、方向が違ってたば」

大和は校門の方に向かっていているようだった。すたすたと歩くと、帰ろうとしている生徒たちの中から、ある生徒の肩を掴んだ。

「君！話を聞かせてくれ！」

その生徒は、曾根さんに振られた男だった。

「い、いや……、あの……」

「さあ、ここは生徒たちが邪魔だ！場所を移そう！」

大和は男の後襟をつかむと、脇の方へ引っ張っていく。

校舎裏の少し開けたスペースに行くと、さっそく大和は質問を始めた。

「君の名前は？」

「高峰……剛です」

「なぜ告白した？」

「……」



急な大和の質問に、高峰は黙ってしまう。

「なぜ告白した！ 答えろ！」

「ひっ。あの……えっと……」

焦りすぎていて、言葉をうまくつむげなくなっている。仕方ないので、助け舟を出してやる。

「なあ、まず、曽根さんとはどういう関係なんだ？」

「あの……、こっちが一方的に知ってるだけで……、向こうは僕のこと全く知らなくて……」

「じゃあなぜ告白した！」

「大和、そうきつくしてやるな。怯えてるだろ」

大和のせいでもた怯えてしまった高峰にゆっくりと、優しく問いかける。

「曽根さんに、好意を持ったきっかけは？」

「えっと……最初、廊下ですれ違ったとき、この人かっこいいな……って思ったんです。で、落研の窓から水泳部の練習が見えて……、曽根先輩かっこいいなって毎日思ってたんです。それで……、いつの間にか、この人と付き合いたいなって思って、告白しました」

「なるほど、ありがとう風太。さて、次の質問だ。君は、トランスジェンダーなのか？」

「いいえ……違うと思います」

トランスジェンダーとは、自身の認識する性と体の性が違う人の総称だ。それではないということは、自分を男と認識したうえで曽根さんに好意を抱いたということだ。

「君は、相手が男でも付き合える性的嗜好の持ち主だと思って告白したのか？」

「いえ、違います」

「じゃあ、なんで告白した？ 振られると分かっていただろうに」

どこか、大和の言葉がきつくなってきたと感じた。そろそろ止め時かなと、大和の後ろにそっと移動する。けれど高峰は、叫ぶようにそれに答えた。

「僕は……、僕は……、分かかって告白したんです！ 振られるだろうなって、分かかってたんです！ でも……でも……少しくらいチャンスはあるかなって、このまま何も言わずに曽根先輩が卒業していくのを見るだけなのかなって！ この気持ちをずっと抱えたまま生きていくんだなって！ 思ってたんです。なら……、なら！ 告白してみてもいいと思っただんです！」

はあ、と高峰は地面に座り込んだ。

「君は……後悔していないのか？ 振られて、相手に気持ちを

突き付けられて」

「後悔してますよ。すごく。でも、告白しないよりは、きつとよかったです」

「……これで、質問は終わりだ」

少しの沈黙の後、大和はそう言った。いつもならもつと質問攻めにするのに、今日の大和はおとなしいと思った。

すたすたと大和は歩き、後ろから僕がついて行っていた。帰り道も中盤に差し掛かり、この時間帯のこの道は人が少ない。

突然大和が僕の方を向き、押し倒した。背中がコンクリートの道に打ち付けられて、痛いなと思った。

「おい大和、急にどうした」

大和は質問には答えずに、僕の顔をじっと見る。間近に大和の顔がはっきりと見える。

「好きだ。付き合ってくれ」

大和はそう言った。少しの沈黙の後、僕は言った。

「なんで、僕を好きなの？」

「分からない。ただ、心が君を求めるんだ」

「いつから僕を好きなの？」

「分からない。いつから好きだった」

「僕の、どこが好きなの？」

「全部。君という、存在が好きだ」

変人という存在は、考えていることに共感できないし、理解できない行動をする。はっきり言って怖い。だけど、分からないなりに分かることがある。共感できないなりに共感できることがある。

「どうして、告白したの？」

「君が、好きだからだ」

今、大和の奇行の理由が分かった。それは、僕が好きだから。行間を埋めることはできないけれど、それでも嬉しい。大和を少し分かった気がする。

「これからもよろしく」

大和を優しく、抱きしめてやる。

名簿

〈顧問〉

森本 晋

〈七十六回生〉

梶尾 宝良

米田 悠朔

〈七十七回生〉

加藤 湊人

酒井 涼

南 翔一朗

宮井 智明

〈八十回生〉

天野 晃希

宵の明星 第二十八号

令和四年四月二十日 初版

編集 宮井智明

表紙 宮井智明

発行 灘校文藝同好会

印刷 灘校生徒会

製本 灘校文藝同好会



灘校文藝同好会